

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520412

研究課題名(和文)パロディー理論の構築と『狐物語』研究への応用

研究課題名(英文)A Generic Parody Theory : its Construction and Application to the "Roman de Renart" Study

研究代表者

高名 康文(TAKANA, Yasufumi)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：80320266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：従来より進めてきた 中世フランスの物語作品『狐物語』における武勲詩や宮廷風騎士道物語のパロディー研究を土台として、「ジャンルのパロディー」理論の再検討と、その中世の物語作品への応用を行った。研究最終年には、13世紀の物語作品『パレルモのギヨーム』をとりあげて、この研究モデルが『狐物語』とは性質を異にする中世文学作品にも使えることを確認することができた。

研究成果の概要(英文)：On the basis of our survey so far developed on the parody of epic poems and chivalry romances in medieval French "Roman de Renart", we aimed to reexamine our "generic parody" theory and to apply it on the medieval narrative poems. In the final year of this research, we examined "Guillaume de Palerme" of the 13th century and confirmed the validity of applying our theory to an analysis of a medieval romance, of quite different nature from that of "Roman de Renart".

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：パロディー 狐物語 中世フランス文学 パレルモのギヨーム

1. 研究開始当初の背景

『狐物語』やファブリオーには、従来から武勲詩や宮廷風騎士道物語やパロディーが指摘されてきた。このようなジャンルの作品に登場する騎士や恋人たちの描写や台詞が、それらに値しない動物や、農夫、町人たちに与えられており、登場人物の内実と、その言行との位相の違いにより笑いがおこるといふものである。

しかし、このような見方は、文学研究者の間では必ずしも共有されていない。Ph・メナールは、1969年に公刊された『中世フランスの宮廷風物語における笑いと微笑』の中で、中世文学においては、パロディーは宗教テキストを巡ってのものしか存在しない、と述べている。その根拠は、パロディーの定義におかれている。メナールによると、パロディーとは、出典指示の技術 (art de référence) であり、本歌が、どのテキストのどの部分と分かるということが必要条件であるという。また、メナールは本歌を貶める意図を持つのがパロディーであるとして、権威への尊敬が強い中世文学において、そのようなことはありえないとしている。

上に述べた研究以来、中世フランスの俗語文学における間テキスト性によってもたらされる笑いの研究についての権威であり続けたメナールが明瞭にこの時代・地域の文学におけるパロディーを否定したことは、現在のフランスの研究状況に影響を少なからず与えたものと考えられる。メナールが批判したP・ニコログのファブリオー研究以来、Cl・ラシェによる武勲詩の作品間のパロディー研究が一冊ある他には、中世の俗語物語におけるパロディーの問題を正面切って扱った研究書はフランスでは出ていない。

高名は、このような状況に対して、1998年にポワチエ大学に提出したDEA論文『『狐物語』におけるパロディー - 通時と共時の視点による狐物語における同時代恋愛物語のパロディー研究』以来、「ジャンルのパロディー」という概念を提唱して、メナールによる狭義の定義からパロディー概念を解放しようと試みつつ、12・13世紀における間テキスト性からもたらされる笑いについて研究をしてきた。その際に特に参照したのは、G・イットとL・ハッチオンの理論である。前者はburlesque descendant (こきおろし) とburlesque ascendant (ほめごろし) という概念を掲げている。

有名な作品の中で崇高な人物が話す言葉やその描写に使われている表現を、卑俗な人物にあてはめるのが前者であり、崇高な人物に卑俗な表現で描写したり、卑俗な言葉を語らせるのが後者である。Cl・ラシェの武勲詩におけるパロディー論でも使われている。中世文学におけるジャンルのパロディーを論じる際に、便利な概念であることは明らかであろう。

メナールは、中世の作品が権威的な作品に対して侮蔑的であることはありえないというが、果たして上で述べたような「もじり」における作者の本歌に対する意図は、必ず攻撃的であると言えるだろうか。そこで援用したのがL・ハッチオンが『パロディーの理論』において提示したパロディーの定義である。ハッチオンは、パロディーを本歌の「批評的な距離のある反復」であると単純明快に定義して、パロディーの対象となるのは、あらゆるコード化された形式であり、テキストそのものばかりでなく、ジャンルに独特の表現でも、他の芸術領域における作品でもありえるとする。本歌となるもじりのテキストの本歌に対する態度 (エートス) は遊戯的でも諧謔的でも尊敬でもありえるということである。

2008年に刊行された『カイエ・ド・ルシエルシュ・メディエヴァル (中世研究誌)』15号は、「中世文学におけるパロディー的なものの誘惑」という特集を組んでいる。12世紀末の『狐物語』から15世紀の演劇に至るまで、先行テキストのもじりから生まれる笑いについて様々な論考を集めており、中世文学研究者のこの問題への関心の潜在の高さを窺わせる。ただし、各論のパロディーの定義はそれぞれの研究者によるものであり、それぞれの研究におけるパロディー、およびそれに隣接する概念を総括的に論じるような論考は収められていない。

2. 研究の目的

(1) 以上で述べた理論モデルをさらに整理して、中世文学における「パロディー的なもの」を巡る用語のバベル的状况の解消に貢献する。

(2) この理論を『狐物語』及びにその同時代物語作品に応用してこの時代におけるパロディー研究のモデルを提供する。

(3) これらに加えて、ジャンルのパロディーおよび、それに近接する文学的営為について、翻訳を通して紹介をする。

3. 研究の方法

(1) 上に記した理論モデルを、G・ジュネットが『パランプセスト』において「イベルテキスト」を分類して提示した「パロディー」および、それに隣接する「パスティッシュ」、「ビュルレスクな戯作」、「英雄滑稽詩風のパスティッシュ」という概念に照らし合わせて練り直す。後二者は、我々の理論モデルのburlesque descendant (こきおろし) とburlesque ascendant (ほめごろし) に対応していることから、この検討は概念の整理に有益であると考えられる。その際には、ジュネットの分類にみられる「風刺的」、「非風刺的」という分類が妥当であるかについて批

判的に検討を行う。

また、2008年に刊行された『カイエ・ド・ルシエルシュ・メディエヴァル（中世研究誌）』15号の「中世文学におけるパロディー的なものの誘惑」特集に掲載されている論文において、パロディー的なものがいかに論じられているかについても検討をする。とりわけ、Ch・フェルランパン＝アシェによって論じられている「ジャンルのパロディー」に注目をする。

(2) 『狐物語』の他に、13世紀のピカルディー地方で成立した物語『パレルモのギヨーム』のテキストを検討して、「ジャンルのパロディー」の実態を探る。『パレルモのギヨーム』は、Ch・フェルランパン＝アシェが、聖人伝、武勲詩、宮廷風騎士道物語といった「ジャンルのパロディー」であるとして論じている。これを参照しながら、この作品について論じることは、理論の練り上げを助けるであろう。

(3) 中世の物語に嘆きの表現の定型を提供したと考えられる作品を翻訳する。また、中世フランス文学について、パロディ的営為についてもふれた概説書を翻訳する機会を得たので、これを発表する。

4. 研究成果

(1) 雑誌論文「フランスのコレージュ教科書と中世文学—『狐物語』の学習によるジャンル概念の形成—」においては、現在のフランスの教育指導要綱と、コレージュ第五学級のフランス語（国語）の教科書を調査した。フランスの中等教育で採用されている教科書には、『狐物語』第II-Va枝篇で狼のエルサンが狐のルナールを誘惑するシーンを紹介しているものがある。彼女が指でしぐさをしたと描かれている場面をとりあげて、このしぐさは何を思わせるかという問いがあるが、これに対する教師用の模範解答には、その前に紹介したクレチアン・ド・トロワの作品に出てくる婦人のしぐさを思わせるとあり、これをパロディーであると説明している。よく似た例が、他の教科書にもあるのは、教育指導要綱がコレージュの第五学級で行うとしているジャンル概念の形成を意識してのものと思われる。中等教育の現場においては、我々のいう「ジャンルのパロディー」が「パロディー」の用語をあてて教えられていることが窺われる。

雑誌論文「『パレルモのギヨーム』と『狐物語』 ジャンルのパロディーについての考察」においては、L・ハッチョン、G・イットの論を参考に組み立ててきたパロディー論に、G・ジュネットの『パランプセスト』をつきあわせることにより、中世文学における「ジャンルのパロディー」の論じ方を検討した。

ジュネットのいう「ビュルレスクな戯作」（先行テキストに登場する高貴な人物に、不似合いな台詞と描写を与える）と「英雄滑稽詩風のパスティッシュ」（先行作品における高貴な台詞・描写を、それに不似合いな人物に行わせる）は、イットのいう burlesque descendant（こきおろし）と burlesque ascendant（ほめごろし）に対応するという意味で、我々の研究にとって重要である。

これらのイベルテキスト性において、下位テキストはジュネットの言うように常に風刺の対象になっているのかということが問題になった。例えば、『狐物語』やファブリオーにおいて、卑俗な登場人物の描写に、騎士道物語の騎士に使われる言葉が使われている例は、「英雄滑稽詩風のパスティッシュ」と考えられるが、滑稽化されているのは、その正体にそぐわない言説を語ったり、言説でもって語られているルナール、エルサンや農夫であることとらえることも可能なはずである。

ジュネットは、上の二つの概念や「パスティッシュ」とは別に、「パロディー」を先行テキストに必要最小限の改変を行う技術として定義した。しかし、これがあてはまるようなテキストは、一般的にはことわざや聖書のもじりというごく短いものに限られる。典型例としてあげられる『かつらをとられたシャブラン』のような長いテキストは、むしろ例外的であるといえる。20世紀文芸において大きく評価された「パスティッシュ」と対となる、先行テキストに対して「非風刺的」「中立的」な概念を作るため、ジュネットは「パロディー」を狭い定義に閉じ込めたといえるかもしれない。

もじりのテキストの本歌に対する態度（エートス）は、それが、変形を最小限に収めたものであるか否かという形態的な分類によって定めることはできない。「ジャンルのパロディー」について論じる時は、誤解を避けるためにG・ジュネットの分類でいえば何にあたるかについてふれながら、L・ハッチョンのいう本歌となるもじりのテキストの本歌に対する態度（エートス）は遊戯的でも諧謔的でも尊敬でもありえるということをお前提に論じることが大切であろう。

(2) 学会発表「『狐物語』と『パレルモのギヨーム』—ジャンルのパロディーについての考察—」と、雑誌論文「『パレルモのギヨーム』と『狐物語』 ジャンルのパロディーについての考察」において、「ジャンルのパロディー」に関する従来の理論モデルを提示するとともに、「ジャンルのパロディー」の具体例として、13世紀に成立した物語『パレルモのギヨーム』の作品分析を行った。この作品には、Ch・フェルランパン＝アシェが、聖人伝、武勲詩、宮廷風騎士道物語といったジャンルに特有な表現のパロディーを指摘している。また、本課題の対象である『狐物

語』の影響についても述べられている。

次の二点を検討した。『狐物語』の影響について、先行研究で挙げられている根拠は希薄にみえる。本当に影響関係があるのか。

『パレルモのギョーム』においてパロディーとされている個所では、『狐物語』におけるほどには先行テキストへの批評的距離が明瞭ではない。これは、先行作品における戦いや恋愛感情の描写の場違いな模倣なのか、あるいは、作者は故意にユーモアをひきだそうとしているのか。

については、先行研究においては、『パレルモのギョーム』において、登場する狼男が盗みを働くというような少数のエピソードにおける共通点や、逃亡をする恋人たちが鹿や熊に変装をするという事実のみが、『狐物語』の影響であるとされている。しかし、それだけでは、物語の影響関係を指摘するは十分ではないだろう。この点を補強するために、『パレルモのギョーム』にみられる変身のエピソードにおいて、『狐物語』にジャンルのパロディーが現れる際に特徴的な登場人物の人間相と動物相の入れ替わりから生じるユーモアが見られることを説明するなどした。

研究発表においては、その際に引用したテキストに《de pren en pren》が、二つの物語に共通して現れることが指摘された。その後、古フランス語の辞書や、電子コーパス調査、各種校訂本の語彙研究を参照することで、これが中世のテキスト全般においても非常に用例の少ない表現であることをつきとめた。雑誌論文では、このことも指摘した。

については、『パレルモのギョーム』においては、登場人物のギョームやメリオールは、正体が分からなかったり、変身をしていたりするものの、もともと高貴な人物という設定であるために、武勲詩や宮廷風騎士道物語に特有の台詞を彼らに話させたり、それらに特有の表現で彼らを描いても、批評的な距離は生まれず、burlesque ascendant (ほめごろし)の効果が生じにくいことが指摘できる。

フェルランパン＝アシェによる先行研究は、この作品の狼男が登場する場面において、宮廷風騎士道物語における「驚異」のモチーフが、本来驚異でもなんでもないものに向けられていることを「ジャンルのパロディー」とであると説明をしている。これは、この研究者の中世文学における「驚異」についてのモノグラフィーの成果を受けたものであるが、残念なことに「ジャンルのパロディー」については、これ以上のことは言われていない。

本研究では、この研究者が、下位テキストとの批評的な距離をとりあぐんでとりあげなかった場面の分析を主に行った。

『パレルモのギョーム』には、武勲詩における合戦の場面の定型句が、合戦において使われている。また、宮廷風騎士道物語において、恋人が相手の気持ちををはかりかねて行う

内的独白のディスクリブルを模したと思われる表現もみられる。しかし、それらのうちの多くには、批評的な距離は見いだしがたい。作者はそのようにしか描けなかったから、先行ジャンルの表現を模倣しているのだという解釈も可能である。

これに対して、ギョームと、その母親のフェリーズが見る予兆夢には、武勲詩やアーサー王物語に現れる予兆夢に対する批評的距離を指摘できる。すなわち、両者とも、謎めいた描写を続けた後、いったい何が問題になっているかが夢の最後に唐突に示されてしまう。これは、本歌においては、夢の後で展開される、これを解釈するプロセスを省略してしまうという意味で、物語の聞き手、読み手の期待を裏切っている。それと同時に、夢の明かされ方があまりにも唐突であることから、それまで隠されていた事実を登場人物に知らせることにより、物語を先に進めようという作者のご都合主義が赤裸々に示されてしまう。それと同時に、武勲詩やアーサー王物語において運命の避けがたさを強調する予兆夢もまた、物語を展開させるための手段の一つであることを明るみにするものである。

フェリーズの夢は、『聖ウスタッシュ伝』に出てくる十字架とキリスト像を下敷きとしている。熊が鹿に化け、鹿の顔の前に現れた像は彼女が生き別れになった息子に似ていたという語りがなされるなり、像への言及はいっさいなされなくなる。これは、『聖ウスタッシュ伝』における啓示もまた、物語的な手法においてはご都合主義によることを明るみにだすものである。このような唐突さやご都合主義から生じるユーモアは『パレルモのギョーム』の作品全体にみられることが指摘でき、作者が意図的にご都合主義を笑いの導線にしていたことが窺える。

批評的な距離がとりにくい、他ジャンルに特有の表現が多く現れる中に以上のような例がみられることは、この時代の聴衆が明確なジャンル概念を持ち、それを利用するユーモアを聞き分けることができたということをよく示すものではないか、というのが我々の結論である。

(3)二つの翻訳(「ソルデル、ベルトラン・ダラマノン、ペイレ・ブレモン・リカス・ノヴァスによる哀悼歌(planh)三編(翻訳)」とネリー・ラベール、ベネディクト・セル(著)『100語でわかる西欧中世』白水社、2014)を発表した。前者は、『狐物語』にも見られる嘆きの表現のモデルになっていると同時に、三つの作品が同じ人物の死を嘆きながら、後に書かれた作品が前に書かれた作品のパロディーになっているという意味で貴重である。また、後者は中世史と中世文学についての概説書であるが、「笑い」と『薔薇物語』の項目には、中世におけるパロディーのことが簡潔にまとめられている。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

(1) 高名康文「『パレルモのギヨーム』と『狐物語』 ジャンルのパロディーについての一考察」『ヨーロッパ文化研究』(成城大学大学院文学研究科)第33号、2014、pp.201-248

(2) 高名康文「フランスのコレージュ教科書と中世文学-『狐物語』の学習によるジャンル概念の形成-」『成城文藝』(成城大学文芸学部)第221号、2012、pp.134(25)-116(43)

〔学会発表〕(計1件)

(1) 高名康文「『狐物語』と『パレルモのギヨーム』-ジャンルのパロディーについての一考察-」, 国際中世叙事詩学会日本支部2013年度研究発表会、2013年5月31日、成城大学(東京)

〔図書〕(計1件)

(1) ネリー・ラベール、ベネディクト・セール(著)、高名康文(訳)『100語でわかる西欧中世』白水社、2014、総頁数168+vi

〔その他〕(計2件)

(1) 高名康文「フランス中世文学における森」, 成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科編『ヨーロッパと自然』成城大学文芸学部、2014、pp.25-48(学科専門科目「ヨーロッパの文化」の副読本)

(2) 高名康文(訳)「ソルデル、ベルトラン・ダラマノン、ペイレ・ブレモン・リカス・ノヴァスによる哀悼歌(planh)三編(翻訳)」『ヨーロッパ文化研究』(成城大学大学院文学研究科)第31号、2012、pp.135-149(翻訳)

6. 研究組織

(1)研究代表者

高名 康文(TAKANA, Yasufumi)
成城大学・文芸学部・准教授
研究者番号: 80320266